

# KDKニュース



## KDK三つの原則

1. 開拓伝道であること
2. 教会を建てあげること
3. 聖書信仰に立つ、教団、教派との協力

## 国内開拓伝道会

発行人 中島 秀一  
〒352-0011  
埼玉県新座市野火止4の8の28  
電話 048-202-1500  
FAX 048-202-1501  
振替 00140-6-57493  
No.126 2020年 8月

## 「目を上げて畑を見なさい」

KDK会長 中島 秀一



「目を上げて畑を見なさい。  
色づいて、刈り入れるばかり  
になっていきます」  
(ヨハネの福音書四章三五節)

この度の「COVID19」の最大の危険性は、その強力な感染力によって、われらの生活様式が根底から覆らされたことにある。とりわけ、「人間関係や家族関係の遮断」が、全年齢層にわたって現実となり、より深刻な孤独化を招くことを危惧している。

わが国のキリスト教会（プロテスタント）の歴史は今年百六十年を迎える。その間、信徒数は約1%に過ぎないが、キリスト教に好意を寄せる人は30%に及ぶと言われている。それはミッションスクールや社会福祉などの感化によるものと思われる。両者の落差の要因として新渡戸稲造は次のように述べている。「日本においてキリスト教伝道事業が失敗してきた原因の一つは、宣教師のほとんどがわが国の歴史にまったく無知であることである。その結果、彼らの宗教を、私たちや私たちの祖先が過去数世紀にわたって慣れ親しんできた思考様式から遠ざけてしまうのである」(『武士道』第十六章「武士道はまだ生きていますか」)。

新渡戸の指摘は、約六〇年間キリスト教宣教に携わってきた私には大きな反省と後悔を抱かせる強烈

な言葉であった。私は現下のキリスト教会の最大の危機は、教勢や財政の低下もさることながら、霊性の混迷による「神と人間との遮断」にあると認識している。この危機は単に一教派、一教会の問題ではない。キリスト教会の存亡に関わる問題である。この危機であればこそ、「正典と信仰告白」を共有するキリスト教会が、一致団結して、新しい宣教理念と方策を立て、キリストの旗印を高く掲げて宣教の戦いに立ち向かわなくてはならない。未だ、日本福音同盟（JEA）やその他の機関からも、この種のボイスが流れてこない。あえて「好々爺の一石」として投ずることにする。

日本は「石ころの土地」ではなく、「宝石の畑」である。

一、日本を十地区に分け、教派を越えた地域教会が宣教母胎となる。

二、直近の収穫と、五十年、百年先の収穫のための地ならしをする。

三、従来の宣教意識や宣教方策を大胆に見直し、転換させる。

その結果、日本の教会は変わった、キリスト教会は一つだ、という強烈な印象を世に与えることになる。

われらの宣教相手は、「心豊かで、寛容な、包容力のある、礼儀正しい」、日本文化に育てられた日本人である。われらは同胞に福音が届くために、もっと謙虚になって、同胞を知り、家族ぐるみで、付き合っていくなくてはならない。

(荻窪栄光教会 牧師)